

歌仙彫

泉鏡花作

一

たそがれの事であつた。冬木の辨財天の御堂の、  
向つて正面から左へ廻縁の、横手の障子がすつと開  
くと、年頃五十くらゐで、中肉で、人がらな出家  
の鼠色の被布を着たのが、据置いた小机に差寄せて  
敷いた、浅黄に唐草が水に藻と見える、古びた座蒲  
團の上から、身體を捻ぢ向けに大な眼鏡を晃乎とや  
つて見込んだのは、狭い境内で間近ながら、晝も薄  
暗いのが、最う時刻で、早や夜にかゝつた額堂の額  
の下。

で、透かすやうに見遣りながら、  
「もし／＼、其處においでのお仁。」と聲を掛  
ける。

トぎよつとした體で、

「はあ、」

と答へた、……薄茫乎と其の暗い中に、誰

か描いたともなし額縁も無くつて立つた、瘦せた青  
年の形が、長棹で一つ拂たかれた蝙蝠と云ふ體  
で、……日のなごりも、月の影も、まだ星も  
ない、初夏の夕暮を、本堂の常燈明が薄りと影を放  
つて、前の大池にすら／＼と、黄色いが些と冷い光  
を曳く、……其の水ながら、灯ながら、上へ  
映り返すやうな、青葉若葉の累なつた下へ、搔窺ん  
だ様子で出て来て、  
「恐入ります……何うも。」  
と云つて、烏打帽を脱いだと思ふと、一掴みに手  
で握る。

「何も恐入んなさる事はありませんが、」  
「否、眞に濟みません。」  
「別に濟まんと云ふではないのです。」  
「飛んだ何うも、お邪魔をいたしましてございま  
す。」

とたゞ詫びる。

出家は膝でぐるりと廻つて、

「決して、お咎め申したではありません、はい。」  
と其の實は咎めたのを、恚う成ると氣の毒さうに、

「御覽の通り、通りがりにも、休んで行かつしやるやうに、木の床凡も差置きますほどで。これが家のうちと一云云ふではなし・・・其とてもぢや、御堂の事、おまゐりとならば、お通夜なさつても仔細ありません。」

額堂であります・・・邪魔も差支へもあらうやうはございませんが、先刻、二時頃お見受け申してから、最う慙う、日も暮れます

私も其の間、一寸々々納戸へ立違ひます・・・お前様とても、御堂の居まはり、石段の上り下り、あちら此方なされたらうが、久しい事ぢや。

今しがた夕飯を濟まいて、此へ參つて見れば、矢張り額堂は熟として居さつしやる。何か御心配な事でもあるか、人でも待合はせさつしやるか、其とも御病氣でありませぬか、と些とお案じ申したに付いて、一寸聲を掛けました。

唯御休息となら仔細ありません、が、別にお心持が何うと申すでもないのか。」

さて近寄つた顔を見れば、氣も落着かず、色も悪

し、太く思沈んだ中に、うか／＼とした、取留めのない風情があるから、出家は、裏問ふ聲も、次第に、いとしと思ふ、調子に變つた。

其時、然うした便りない、覺束ない中にも、寂しいながら莞爾して、

「難有うございます、御隠居。」

と云つた、又其が相應しい出家の風采だつたのである。

「お尋ねですから申します。實はこゝに人を待ちます、……心配な事もございます。屹と病氣もあるんでせう。」

と思ふには似ず、涼しい聲。

黙つて顔を見合せた。

青年は翁鬱した樹立を仰いで、

「あゝ、成程、最う日が暮れます……長い

間お邪魔をしました。實は、はじめから、時々障子

越しに、御隠居、御僧が然うやつて在らつしやるお姿

は見て知つて居ました。が、何ですか、極りが悪く

つて、更めてお許しも申受けないで居たんで

す……お詫びをします、それぢや此で失禮。」

と會釋する。

出家は乗掛るやうに障子から半身出て、

「まあ、然うお急ぎなさらんで、些と此へ。」

と掌を向けて縁に支いて、

「私が言葉を掛けまして、急にお歸りとあつては、

矢張りな、何かお咎め申したにも當つて心持が可う

ござりません。唯今も言ひます通り、實はお案じ申

したに就いて、一寸と御意を得ました次第ぢや。

御都合なれば何時までも御緩りとなさつて、決し

て差支へありませんが、何うかお心持も悪いとか、

而して、其のお待合せの方は如何なされた。」

「其ですから恐縮します。御場所がらで、何とも申兼ねましたが、私の待つて居りますのは婦人なんです。」

と何か、屹とした、聊か激した様子で言つた。

「いづれな、其の邊で、はゝあ、」と少し笑ふ。

「否、」

と又呼吸急いで、

「然し、怪しいわけではないのです・・・いづれ、又更めてお参詣なり、お詫びになり伺ひますが、私は恚う云ふものでございます。」

と云ふ中に、懷中を搜つて名札を取つて、衝と敷居へ上つて縁側へ差置いた。

「はい、はい。」

と請取つて一寸揖し、仰向けに燈に翳して、眼鏡をこと／＼と動かしたが、

「矢的三千枝さん、とおつしやるか、これは御丁寧な。私は上崎典和と言ひます、堂守でございます

よ。」

「はじめまして……否、其の婦人と申しま  
すのが、矢張……と云ふのも可笑なもんです  
けれども、先刻はじめて逢つたばかりなんでして  
ね……私が此處へ参りました時に、丁ど御堂  
の階の處に杵屋へ通ふと云ふ形で、眞赤な風呂敷を  
持つて、背後向きに立つて居ました、恚う、其方を  
拝んで」

と矢的は其の横手から、斜めに一寸頭を下げたが、  
引摺んだ鳥打で、胸の所を軽く敲いて、

「御僧もお見覚えではありませんまいか。」

「若い婦人ですか？」

「え、色の白い綺麗な娘です。」

「成程見掛けましたやうにも思ひます、……  
二時半頃な。」

「丁ど其の時分、」と手を下げて、片手で、其  
の二の腕のあたりを壓へながら、熟と出家の顔を見  
る、矢的は、手掛りでも得さうな氣構へ。」

典和法師は眼鏡を掛けた額に手を當て、咳を一つ

して、

「所ところがな、それが貴客あなた、．．．．何なにか道心堅固だうしんけんこと云いふのを吹聴ふいちやういたすにあたり、銜てらつて申まをすかにも聞きこえましてお恥はづかしいが、御覽ごらんの通り、坊主ぼうずの棒ぼうで一向かうな木の端はしでございます。依よつて、．．．．お守もりを申まを上げる御主人ごしゆじん、御本尊ごほんぞんか御本尊ごほんぞんゆゑに、先まづ、切せめて其その煩惱ぼんなん、あけすけに申まをせば色氣いろけだけは、と存ぞんじて此こゝへ参まゐつた、．．．．まだ恚かうまで老朽おいくちませぬ以前いぜんから、年少としわかな婦人ふじんに逢あひます時は、必かならず、ぢつと、其その、」

と眼鏡めがねを取とつて、一ひとつ揺ゆすつて、小机こつくゑの端はしへコトんと置おいて、

「見みまいやうに目めを瞑ねむつたでございます。癖くせになり、癖くせになり、婦人ふじんを見みますと今いま以もつて、眩まがししいやうで、はツと思おもふと、ちらりと姿すがたは分わかりまして、つひに顔かほと云いふは覺おぼえません。．．．．いや、私わたしが顔かほで恚かう申まをすと、狸寝たぬきねとやらに聞きこえませうで、はツはツはツ。」



典和が笑ふにも、矢的は眞面目であつた。

「すると、其の娘をお待合はせで、」

「實に申譯はありませんが、然うなんです。」

「お詫には及びません、然うした事なれ

ば緩わと・・・と申して此が如何なものか、本

堂に御休息とは、些な、御本尊の思召しもあらうで、

私からは申兼ねます。が、其とてもで、何氣なくお

籠の分ならば兎や角うは言ひますまい。」

と小首を傾け、

「しかし、大分手間が取れますやうな、が何かな、

お逢ひに成ります時刻なぞ、大抵お打合はせがあり

ましたかな。」

「お星様も御存じです。」

と誓ふが如く、すつくと立つて、矢的は池の彼方

の、柳を黒く、水を青く、屋根を離るゝ明星を此の

時仰いだ。

「待つと申して境内を憚らねばなりませんやうな、

怪しからん意味なのぢやありません。唯今も申しましたが、私は何です、此の頃言ふに言はれない屈託があります。爲めに、仰つ反つで、魂なんざ、頭から足へぐら／＼と轉げ廻つて居るやうに思はれまして、時々茫乎して、まあ、確乎しないか、と自分で活を入れたり、あゝ、助かつた、よく電車に轢かれなかつたと線路で活を入れたりしますんですから、目さへ、何う成つてるか、其さへ分りませんもの

店賃のしみつたれた長屋でも、住つてれば、自分の家の、其の家でさへ、時々赫と成つて、馬の顔が覗いたり、犬の首が轉がつたりする始末なんですから、他家様の、分けて恚うしたお住居です、何を見て間違へたんだか知れませんが、

と俯向いて、自から氣を沈めむとする趣であつた。

「青葉の薫に、ひや／＼と包まれた中に、藻も萍も見えませんが、大池の水の香と、何處からともなく、香花の匂がしますばかり……赤いものは灯の色で、其も薄し……咲残つた椿一つ、紅

いろの菖蒲があるでもないのですから、眞晝間、何を  
見違へたか分りませんが、向う裏の石段を一畝り上  
つて来まして、其處の石の手水鉢、右に・・・  
釘店、佐原佐助、左に・・・江戸橋、佐原勘兵  
衛としてございますね。」

「然れば・・・よく御存じで、」

「えゝ、」

と若い返事して、何か極りが悪さうに見えた。

又・・・自から嘲ける如く打棄つたものいひで、  
「鳥居際では、左右の獅子が、前脚を支いて、天  
眼に、翻然と一つ狂つた處、・・・此の御堂だ  
けに兩方とも牡ではないらしく見えます。嚇と威す  
やうに揃つて口を開けた中に、小判の形の青葉が四  
五枚づゝ銜へさしてありました、何かのお禁厭なん  
でせう。」

「近所の御婦人がなさるゝのぢやが、さ、何の禁  
厭か、私は却つて心得ません。」

「其も見ました・・・途中で、深川座の前へ  
立つて、けばノ、しい烈しい繪の具の庵看板を視め  
ながら、何が描いてあつたんだか、いまだに分りま

せん。それから見れば、獅子の舌の青葉を見たら、石に刻んだ奉納主の名も見ました、目は確だと思ふんですが。其處で、  
と指す、彼方に、其の御手洗を背後にして、くりと横向きに、身を、典和の坐ふ縁に寄せた。

「手を洗ひながら、階の正面、寶錢箱の左です、欄干の許に立つた、其の赤い帯と、其の右の袖に捧げるやうに軽く乗せた、緋色した風呂敷包みを持つたのを一寸見ました。」

「は、あ、  
と矢的の顔を覗くやうにして、典和は又ホカリと眼鏡を嵌めたが、障子から蝸牛、角振分けて、大廻りに階の方を透かしながら、

「其の御婦人でありますな、お約束をなさつたは。」

「

「

#### 四

「まあ、然うなんです。」

矢的は忙しさに巻戻抜いて持ったが、

「否ございます、お構ひなく。」

と典和が差出す、手の附いた瀬戸の手焙に及ばず、  
馴れた様子で燧火を擦った。・・・其の火も御  
堂の片陰に、小さな燈明のやうに見える・・・  
汀の樹立は深かつたのである。

「其の娘は、いづれお参詣をして居るんでせうと  
思ひますから、人が行つちや、分けて男ぢや氣が散  
つて悪からうと、密と控へて待つて居て、――  
一寸又俯向いて拜んだ様子で、背後を向いたなり向  
うへ出ましたから、――其の後へ行つて、而し  
て私も祈念をしました。」

ト其の娘は、正面の石段も下りず、私が來ました  
獅子の方へも行かないで、あの、額堂の下へ入つて、  
薄暗い中に、くつきりとした姿で立つたんです。

日南は汗が出ます。日中は随分暑いのに、洋傘も日傘も持たないやうでしたから、一息涼んで歸るんでせう、……服装は澤山よくないけれども、松竹梅が額でも納めさうな娘だ、とそんなくだらない事を考へながら、私は何心なく、歸るつもりで、其の石段を下り掛けます時、ばつと花が開いたやうに額堂の中に燃立つた色があります。

はじめは、上氣した顔でも煽ぐのに、振を翻して長襦袢の袖を引いたのかと思ひました。

彼處に、自然木の眞黒な腰掛が置いてあります。

あれへ、其の緋色の風呂敷包を開いたんです。」

「其の娘が、はてな。」と持った煙管をばつたり置く。

矢的は卷蓑の灰を拂いて、

「御僧、私は目を射られたやうに思つて、と視ました。……清元長唄の稽古本か、裁縫の道具でも入つて居るのかと思ふと、然うぢやありません、……萌黄だの、紫だの、中でも赤いのは、

白い胡粉の顔が見えた、可愛らしい彩色をした木彫の  
人形。」

「木彫の人形。」

と典和が鸚鵡返しをやつたほど、矢的の其の聲に  
深い意味が籠つて聞えて、柳に青き明星と、葉越に  
紅さす燈明とに、薄りと彩られて、額堂の暗い處に、  
髻髻として今も俤に立つばかり、  
「思ひも掛けず不意に見ました、場所が、辨財天  
の御堂と云ふんで、光が添つて見えたんせう。」

此方で視めて、一ツ一ツ刻んだ眉も口許も分りま  
した、業平、小町、喜撰、遍照、・・・あの繪  
の通りの姿をしたのが、六個あつて、其の御僧、人  
形が、六歌仙。」

典和は背屈みに腕を組んで、

「あゝ、珍しい。」

「珍しいより、吃驚して、私はつか／＼と宛然夢  
中で、

まあ、可愛らしい。」

と云つて、額堂へ入つたんです。

美しい娘が一人で、其處に、然うやつて、雛遊び、と云つた處へ、こんな野郎が、可愛らしいなんぞと聲を掛けて、づか／＼入つて行つて可いもんですか、何うです、御僧。」

聞惚れて居た典和法師は、急に何か問掛けられたので、つけもなく、

「はあ。」

と云つた。

「可いか、悪いか、御僧、考へて見て下さい。」

と入つたと云ふ當人が、そもさんか、詰るが如く眞向から、嵩にかゝるので、聊かあしらひ兼ねた、と云ふ體で、フト黙つたが、咳で一寸つないで、

「釣れますか、などと文王そばへ寄り……と云ふ川柳を聞きました、それ體の所でありませうかな。」と云つたつけ、……封手が眞顔で、吃と見据ゑるばかりにして居たので、些と氣の寿と云つた面色。



老實に眼鏡を掛直して、

「けれども差支へはありますまいか．．．餅  
草、嫁菜、摘草の風呂敷を覗かぬものとも限りませ  
んな。封手が娘でも、小兒でも。」と典和は宥め  
るやうに言ふ。

「だつて、何です。」

と尚ほ獨で急込み、

「．．．まあ、可愛らしいは、可厭な言ひぐ  
さぢやありませんか．．．吃と娘は變な野郎  
だと思つたでせう。しかし御僧、」

と矢的は漸と少し落着いたらしい様子で、

「然うした所の額堂へ、其の娘の傍へ入込んで  
成らないと云ふ、假に爰に堅い掟がありましても、  
是非然うしないでは居られない譯があるんです。

其だと又．．．可愛らしい、尚ほ變です

が、．．．御僧、何か私の言ひます事は取留が  
ないでせう。けれども一目見て間違へはしないんで  
す。娘が其處に持つて居ました．．．彩色した  
木彫の六歌仙と云ふのは、實は私が拵へたものなん

ですから。」

典和の眼鏡は、人影を見た木兎の如く、夜の翠に輝いた。

「御免下さい、」

と躍り上りに縁の端へ腰を掛ける、と典和は黙然で押出すやうに蒲團を直す。

敷くに及ばず、疲れた風で、手を支いて、

「私は、實は學校を出ましてから、未だ何ほどの條業もしませんけれども、これで何です、食つて居る職業に、がら／＼人形、木葉彫と云ふのを遣ります。」

と寂しい笑を泛べたが、細面は凜とした。

まだ長い、其の巻莖を突刺し棄て、訴ふるやうな口吻で、

「長屋住居の御僧、六疊敷の眞中に、一昨年の暮頃から、一ツ轉がつて居る、花桐を切つた木材が一個あるんです。」

意地にも、義理にも、生命にも、何時までも然う遣つて、目鼻のあかない丸火鉢のやうな形にして、

打棄つて置くわけには行きません。

第一桐の方で迷惑します。

明けても、暮れても、久しい間、面白くもない同じ野郎が、抱いたり、撫でたり、睨んだり、齒齧をしたり、唐突に怒鳴つたり・・・やけ酒を飲めば鼻唄を聞かされるんだ、堪るもんですか！ 然うかと思へば、日がな一日、鬚の生えた清姫と云ふ形で、七巻半に、堂々繞りをされるんですもの。

氣の毒にも何にも・・・此が女房なら、最う疾くの昔遁出します。」

と苦り切つて、

「・・・又桐の其の木材にした處で、大抵働きのない人間に愛想を盡かして、自分で葉を生すなり、芽をふくなり、花を咲かすなり、乃至はベツカツコをするなり、何うにか手足でも拵へて駈出しさうなもんですけれども、化け銀杏の死骸でも、狸が棲んだ空洞の所でもないんですから、何うにも成らないで、筵の上に白けて居ます。」

勿論傍に寝て、夢には時々魘されます。・・・最う此の頃ぢや毎晩です。ものがものだけに、可恐

くも凄くも見えるんぢやありませんが、船に成つて  
荒海の中を引摺つたり、砧に成つて、此の手足を打  
つたりする・・・鳳凰なら、これが人柄だと羽  
衣にも見えるんでせうが、對手が私ですから、長橋  
袈に變じて横腹へズドンと來たり、花牌に化けて、  
ばら／＼と散るかと思ふと、其奴が、雨に成つて、  
土砂ぶりに屋根から浴びせる。

風も吹きます・・・ト鉋屑が咽喉を巻いて、  
おが屑がむう／＼と目、口、鼻へ、押かぶさつて、  
息も詰るぢやありませんか、虚空を掴んで目を開る  
と、冷汗びつしよりで、鐘の音にふる／＼と其の木  
材が動くんでせう。」

「夜が明ければ茫乎して、仕事も何にも手に着きません。．．．ぢや出来ないから、と云つて、此が其のまんま打棄つて置けるのぢやないんですから、片時も氣の休まる間はありません。」

で、飯を嚙めば砂利のやうで、湯水も灰汁を飲む氣がします。」

ぐた／＼と成つて、のめつたり、拳を握つて突立つたり、何の事はありません、此の頃の心持は、宛然大地震の中にも坐つて居るやうなんです。」

典和は聞いて、傷ましい病人に接する状に、掌を擧げて、吸續けた煙を拂ひ、

「處で、先生、」

と更まつて煙管を置いた。

「其の御工夫をなさいます、木材と申すのは、一體何をお刻みに成りますので、矢張り其の六歌仙でございますかな。」

「否、六歌仙は小遣取。苦し紛れに酒を飲みます、

ごまかしの巾着錢です。

密賣を遣るんですな．．．．極内證で．．．．  
其も自分で拵へたものなら、長屋の出窓へ一個幾ら  
と、正札を着けて、青いんだの、赤いんだの、宿場  
の饅頭見たやうに、大びらに安賣をすれば可いんで  
すが、卑怯で其も出来ません。

唯今、

と一息ついて、典和が響應の澁茶を一口。

「お話し申しました、私が持餘して惱んで居る其  
の木材には、注文主があるんです。他所の令夫人な  
んです。」

と言ひ掛けて、熟と胸に手を置いた、

「いづれ私のやうなものに、そんな事を頼まうと  
云ふ人なんですから、幾干か變つてには違ひない。  
何時と云ふ日も極めず、何を刻め、と云ふ約束もな  
しに、最う久しい間、月々のものを買いでくれます。

はじめは東京に居て、其から引續きなんですが、  
今は其の主人と一所に遠方へ參つて居ます。秘密と  
云ふんぢやありませんが、主人が自分でするのでな

く、若い夫人が、自分の小遣の中から繰廻して寄越すんですから樂なものぢやありません。

尤も昨年もつとの春はるごろまでは、其の夫人の實家と云ふのが、伊豆に鑛山くわんざんを持つて、随分繁昌ずいぶんはんじやうして居ましたから、自然しぜんお化粧料けしやうれうと云ふ融通ゆうつうが付いた。が、霖雨ながあめの山崩れで、金も銀も不殘濁水のこらずじこりみづに成つてから、其方の藏くらは潰れたゝめに、今ぢや全く、お手許金ばかり、と成ると、湧くのではないから定限かぎりがあります。

下着したぎ、羽織はおりは脱がないまでも、其の時々の流行はやりと云つては、コオトもヴェールも何にもな。．．．遺失おとしたと聞くが當には成らない、主人が久しい間あひだの洋行土産やうかうみやげに贈られたと云ふ、瑞西製スイツルせいの金時計きんどけいも、細い金ぐさりも、帯おびに懸つちや居ず、瘦せた指ゆげも飾なしに、唯細く白いばかりです。

髪かみとても、其の通り、珊瑚さんごもなし、櫛卷くしまき、襲着かさねぎもしない膚薄はだうすで、婦人何とか會くわい、連中れんちゆう、赤十字せきじの交際つきあひもせず、大な邸おほきに奥深く、尊菜じゆんさいが浮いて、岸きしに初はつ茸たけが生えると云ひます。．．．大な池おほいを前にして、遠い所とほに、

と見返つて恍惚した。冬木の池には漣が立つて、  
包んだ夜の一所、明星が白く柳を離れた、水の色は  
恰も海の如く縹渺として見えたのである。

矢的の聲は落着いて、

「あゝ、不思議な所へ参つて居ります。無論、う  
か／＼と来たものではありませんが、思ひがけない、  
御僧、見知越でもない方にお目に掛つて、こんなお  
話をしようとは思ひませんでした。最う暗く成りま  
した……路も遠し、此で失禮いたします。」

「いや少時、貴方、恚やうな端近、蕎麥の香も如  
何と存じて、唯今納戸へ餛飩を申付けました。」

「まあ！ 何時の間、」  
「池を御覽で、熟と俯向いておいでの内に。」



七

「……此の春四月、公用があつて、主人が上京をした次手に、其の夫人も見えました。築地の旅館から使があつた、が長旅で弱つたから、今夜は休んで、翌日は晝過ぎに逢ひに行く……と云ふんです。

私の狼狽方をお察し下さい。小刀一ヶ所、相鑿一手、手が着いて居るのぢやありません。お庇で活きて居る癖に

翌日は、其の时分、目も離さないで居ましたから、出窓の隙間を横に切つた、車の上の其の姿が雲を下りるやうでした。で、玄關へは飛出したけれども、面目がなくなつて口も利けない。

格子を開けて入るのを、障子を盾に、硝子越に見たばかり、夫人の方でも熟と視ました。

婆やが、……五十ぐらゐです……私

は其の雇女と二人住居で。――其が、框で出迎へたんです。

夫人か、矢張り障子の椅子越に優しく睨んで、入つては悪いんですか、何うしませう……。遙々逢ひに来ただけけれど、私最う上らないで歸ります。

と片頬笑みに、怒つた細い横顔を見せて、……。其の癖、眞個に引返すと思つて、太く慌てた婆やの手へ、土産の包みと、お召の半コオトを脱いで渡したんです。

車夫に、歸れ、と云つて、一枚小袖に細りと紋着の羽織を着た……。旅糞れで、櫛巻にもはら／＼と、透通るやうな耳へ掛けて、おくれ毛の、浮世を知つて苦勞らしく見えるのが、澄まして上つて、私より先に、ずん／＼仕事場へ通つたぢやありませんか。

御僧、仕事場にも客間にも、人の坐れさうな處は其の間。

ト坐つたでもなし・・・立つたでもな

し・・・轉がつたと云ふでもなし、しまひつか  
ん、・・・右の木材、ずんど切の一件ものが、  
ポカンとして床の間に居るんでせう。

些とは片附けて置いたんです。

其の、のつぺらぼうとした木材と、とぼんとした  
木彫の先生、

と、今は、御堂の小机を横に、典和法師と差向ひ  
で、蒲團に割膝で居た、矢的は我が手で、耳を引撮  
んで苦笑した

「・・・先生の其の顔とを見較いべなが  
ら、・・・優しく一寸俯目に成つたが、黙つて  
脱いで、美しい、派手なが何處かヒヤノと身に染  
むやうな桔梗色の其の羽織を、すらりと桐の上へ掛  
けました。汚い部屋も、花野に月の明りが射すやう。  
しなやかに引いた袖陰れに、裏梅の紋の白いのが、  
人の情に月を浴びた、眞珠のやうな、露に擬うて見  
えました。

何にも言はずに、

東京見物に参りました、今日は急ぐの。明日何處かへ案内をして下さい。

ト軽く衣紋を合はせながら、華奢に消々とした斜つかひの氣高い姿で、縁越しに臺所の様子を、それとなく附したんです。

私は胸がせまりました。・・・

と差俯向いてしめやかに、矢的は聲を曇らしたが、「唯今でも思ひます・・・何の彼のと屈託をしようより、其の夫人の、桔梗紫の羽織が掛つた、其のまんまを、あの木材に刻んだ方が佳さうだと

まだ、其よりか、羽織を借りて、正のものを、其れなり包んで掛けて、今秋又上野で開く・・・例年の展覽會へ出品しようと思ふんです。そんなに、私のために心配をしてくれます、其の人は、いざ、出来たものを、自分のものにしようと思ふのぢやありません。其の展覽會へ出品をさせようためです。ですから、もし、其の會の審査員が許したら、木材に羽織を被せて、熨斗だけは附けないで、ずツと出して見せうと思ふ。」

「私は其より、」

と矢的の聲に力が籠つて、

「審査員が許さないでも、其の人が差支へさへない  
いと云へば、構はず、羽織を借りて被せて、床の間  
の板を引剥がした奴を臺に着けて、展覽會へ背負つ  
て出る、が無論許可には成りやしません。」

「無法な事を考へますのも、實際、何を刻まうか、  
と途方に暮れるからなんです。」  
と又沈んで云つた。

典和は眼鏡で頷いて、

「種々御苦心の様子、何うやら分らぬながらもお  
察し申す事が出来ます。で、まだ何とも御分別は着  
かんでございますかな。」

「雲とも水とも、天地の間に、芥子粒ほども、全  
然まとまりが付きません。．．．．仕事は急  
ぐ．．．．唯今申した事情ですから、其の人にも

然うまで續けて厄介を掛けるわけには行かず、と云つて、何か一つ出来ないでは、かれ此二年越、お手許金頂戴で居るんでせう。腰揚の中――其の何です――夫人と云ふのは、胸が切ないといつて、紙人は腰揚の中へ入れて居ます――其の輕いのを承知ながら、今更斷るにも斷切れない苦しさをお察し下さい。

で、先方へ迷惑を掛けまいためには、差當り、片時も迅く、仕事を仕上げるにあるんです、が焦れば焦るほど方がへしが着きません。

恚う、考慮の取留めのない事と云つたら、雲の上うへに雲雀を一羽と思ひました。・・・雲なら雲雀も雑と可いとして、私が拵へたいのは、ほんのりと霞んだ蒼空に、目に見えない雲雀が囀る、・・・其の譬へば晝の星が、笛を吹きつゝ、くる／＼舞つてるやうな聲を、一つ彫込みたいと思ひました。

其のひとふたりで、目黒の青麥の畦路で、花の霞む上うへに聞いたからです。

此の春、東京へ見えた事は申しましたつけ。

都は花の眞盛、歌舞伎も帝劇も大評判。

と上野へも日比谷へも行きたいとは言はないで、  
静な處で摘草がして見たいと云ふ・・・婆やに  
相談をすると目黒を教へたので、翌日連立つて出掛  
けたんです。

脚馴らしに一鞍責める騎手が一騎。あの、廣い馬  
場の幽な向うに、鷗が飛ぶやうに見えるばかり、霞  
の花も夢かと思ふ眞晝間、寂として誰も居なかつた  
もんですから、

暢氣に遊びませうよ。

と云つて、夫人が御僧、身輕に馬場の埒の上へひ  
よいと乗つて、スーツと立つて歩行いたぢやありま  
せんか。

幻の浪かと思える・・・陽炎に流るゝやうに  
浮いつ沈みつ。早く一埒内側の、直き目の前へ駆け  
て来た、其の乗手より、埒の上に、花より高い、美  
しい姫神の姿に、馬の方が嘶いて、前脚で棹に立つ

た。

あぶな  
危い。

と私は下に引添うて、夫人が持ったなりの洋傘の尖を持ちましたつけ、ヒヤリと脈に響いて冷たかつた。

来る路の小川の淀みに、お玉杓子のうじや／＼とかたまつたのを、其の人が、洋傘の其處でぼちや／＼と驚かして、嬉しさうに遊んだのが、まだ乾かずに居たんです。

わたし  
私は冷さが身に染みだ。

あの、木材を切細砕いて、せめて、お玉杓子にでもしたいもんだと考へました。ですもの、御僧。

満足にお玉杓子さへ出来ないものが、雲の上に囀る雲雀の心持が刻めますか。

みつか  
見附りません。二三人、野面に居る百姓に聞いたのは  
摘草は名ばかり。餅革も嫁菜も葉の揃つたのは



ですがね．．．．二人で歩行くのを怪しからないと見る所爲で、故とない處を教へたのだらうと思ふと、然うでもない、中でも正直な奴等の云つたのを聞きなさい。

此の米の高いのに．．．．そんなものは此方人等が摘んで賣らあな。

「　ですつてさ．．．．」

「其の夫人が、ひよろりとした、つくしを二三本と、色の薄い董の花を大事さうに持ちながら、

あゝ、あれは何でせう。雲雀です。

と背中合はせで、明るい麥畠の青い中で、薄り虹のやうにかゝつた蒼空の、白い暖い雲を見ました。

御僧、爾時の雲雀なんです。が、さあ、其の心持が、玄能ぢや、此の腕が堅くつて敲出すわけに行かんです。然うかといつて、柔い、寂しい、美しい、鳥の羽を刷毛にしたのでは、木を刷れませんものね。

だらしない事つたら、雲だの、雲雀だの、と云ふと、口だけでも何か偉さうに聞えますが、其實は、歸送がけに苔香園と云ふ植木屋の庭へ入つて、四阿へ休みました。其の前のちよろ／＼流れの、一所、草のひや／＼とある池に成つた、角ぐんだ蘆の中に、玩弄ほどな藁屋を飾つて、整然と圍爐裡まで切つたのがありました。背戸と思ふ、其のつくし

の丈ほどな柳の樹の植わつた下に、高麗鼠が廻しさうな小さな水車が仕掛けてあつて、ちやツ／＼と器用に水羽を廻しながら、綺麗な雫を、短かく揃つた、菖蒲の青い葉に浴せて居ました。

けちな、私の了簡ぢや、唯其の水車さへ、大車輪の如く、中空に渦を巻くかと思へたんです。其の人が傍に居るので、……何にも拵へないものは、箱庭の水車にさへ恥入つた。

此の菖蒲の咲く頃には、些とはお出来なさいませか。催促はしないけれど、私、身體が弱いから……蒼の中に……と云つたんですが、お話をします通り、今以つて何の形も着きませぬ。……と云ふのが、何か又……其の木材の胴腹へ藁屋と水車をくり抜きにして、刻んで、菖蒲の葉を添へたやうな、氣がして居たのが、矢張り其のまゝに成つて、——愈々菖蒲の咲いた、此の頃ぢや、面目なくつて、申譯がなくなつて、手前で小さな蛙に成つて、目黒の其の池の縁の藁屋の中へ、潜込んで、ちよんと手を支いて、けろりとして、

雲雀と一所に高い處に、恩人の其の夫人を視めて居たいくらゐなもんです。

なぞと云つて、冬木の此の池のまはりを、きよと／＼うろついて居る處は、尻尾の方から半分方、蛙に化けてるかも知れません。」

と、矢的は冷たさうに、皺を刻んだ服の膝を、二ツ三ツ敲きつゝ云ふ。

「目黒ぢや、劍と炎で恐怖いから、同じ蛙に成るんなら、辨財天のお膝許の方が、と思つて胡亂々々と参つたんです。」

典和が口を挟む間もなかつた。  
崩した膝を居直つて、

「來がけにも、御僧聞いて下さい。額に汗がじと／＼で、相鑿を片手に、片手に玄能を握つたなり、くな／＼なえたやうに成つて、・・・枕にも出ない桐の丸太棒を睨んで打倒れて居たんですがね。

優しい桔梗紫の、梅の紋の羽織の袖が掛つては居

ませんから、ずぶり、とのつぺらぼうと露出で、白茶けて嘲笑つて、ト大きく構へて、四ン這ひの猿を挫いだ、臼と云ふ面で居る

魔うなされようぢやありませんか。

うとノ、仕掛けた處を、岸破、と起きて凝視めましたつけ、御僧。口惜くつて涙が出ます。

手が汗ばんで、仕事しごとが、ねばつて、それで相鑿あひすきの動きうごが着つかないやうな氣きがしますから、擦もり取とつて、両手りやうての道具だうぐを筵むしろへ落おして、フイと立たつて、狭せまいが縁えんがあるんです。・。・。鉢前はちまへの手水鉢てうづはちの處ところへ出て、

突然柄杓いきなりひしやくを取とらうとすると、射いるやうに、此こゝへ、「と云いふ、眉まゆが顰ひそんで、カツと額ひたひを片手かたてで壓おさへた。

「此この雨上あめあがりの初夏はつなつの烈はげしい日の光ひかり。・。・。」

「椿の樹の厚ぼつたい、濃い緑の葉を颯と、這つて、ばつと瞳を射たんですが、くら／＼と眩んだ目前へ、南天よりも丈の高い、其の手足鉢の四五寸上と思ふ處へ、眞紫の強い影が、顔の色も眞白に成つたか、と思ふまで、一つ閃めいて映つたんです。

吃驚して、塞いだ目を俯向けに開けて見ると、一坪ばかりの庭ですが、眞中の日當りへ、瓦の缺木の屑を、いけぞんざいに、叩合はせて拵へて置きます、花壇の片隅に植ゑた、縁日ものゝ、小さな紫の花の咲いたのが、光線に輝いて、上へ幻が拔出したんです。――何うでせう、草花の吐いた氣に、目が眩むやうぢや仕方がない。

私は床の暗い柱に、眉も鼻も揉込んで、男泣きに泣きました。

此方へ参りますにも、電車を下りてから、路を訊いて、――深川座でせう。――芝居の前を薄ぼんやりと通ると、木戸はまだ閉つて居ましたが、樺色

や淺黄の幟が、軽い塵の風を誘つて、．．．散る憂慮はないのですから、庵、看板、づつと、廂へ打つた櫻の造花を、さら／＼と掠めて、翻々と、屋根の提灯も眞赤です

ト見ると、まあ、可かつた、．．．此が紫だ、と大道で腰を抜かす、と思はず獨言が出る始末橋の上を、びん／＼と鳴つて．．．電車が、ぐん／＼と行く、と又吃驚する．．．

不動様の裏へ續いた水の岸を、柳の並木は聞えたが、電車が駈出さうとは思ひませんもの。

一體、辻に居た煎豆屋に路を訊くと、ずん／＼其の通りをおいでなさい、ひとりでに橋へ出ます．．．其の橋を渡つて行け、と教へたんぢやありませんか。

深川で冬木の路を聞いて、ひとりでに出ると云ふ橋だ、御僧、青柳の中に筏を渡る事と思つた處へ、鐵の棒を、火の車見たいなのが轉がるんです。

私は呆氣に取られた、尤も……」

と矢的は上の空らしいが指折り算へて、

「八九年以來、……酔過ぎた時でもありませんと、永代を渡つた事はないんですから、變るのも其の筈ぢやありません。——や、こりや、うか／＼して方角を間違へたかも知れないと、最一度、剥身屋で煙草を賣つてる、小店の婆さんに聞きました。

違ひはしません、矢張り渡つて、向うに丁度普譜中の學校がある……」

「ございます、立派に建直ります、小學校で。」  
と典和は口を挟んで云ふ。

「え、其に附いて曲れと言ひます、……成程、栈橋へ着いた、汽船の腹を見るやうな煉瓦造が、屋並の上へ浮いて見えます。

又、此にも氣を抜かれた。

と云ふのは、茫乎と橋を渡つて、片側をぶら／＼で、浄土宗心行寺、と額を讀んで見たまでは可かつたが、……やがて、此處等だつけ、とひよい



と見ると、學校が消えて、無い。

あの、大な建ものが、と慌て、伸上つても、影も形も、根こそぎ何處へ飛んだか、全然見付からないぢやありませんか。

電車を斜に切つて、向側へ駈出して、漸つと、丁度今まで、其の屋根の下に自分が居た事軒並にあるんぢやなく、路地へ引込んだ建もので、傍へ附着いたんでは、成程見えないのが道理だ、と氣が着きました迄は、ぼかんとして其の心細さつと云つたら。・・・胸へ空洞が出来て、深川の町が、スー／＼水のやうに大川へ抜けるんぢやないか、八幡前の大煙筒が、あの、眞黒な津浪のやうな煙と一つに、ぐら／＼と頭の上へ崩れて來やしないか、と慄毛立つまでだつたんです。

虚氣さつたらありやしない。」

「馬鹿が、」

と吐出すばかり、自分で云つた、が、口惜しさうに肩が震へて、

「……それでも、まだ、何處か心底には、瘦我慢にも仕事のこととは忘れないと見えて、フィとあの、石段の下の、妙な自然石、——恚う犢が蹲つたくらゐの大きさで、ずんと控へた形は、狛犬のやうにも見えませんが、よく見ると、ずる／＼と皺が入つて、上へ巻いて、蟒蛇がとぐるを捲いたやうな、不氣味らしい。……然うかと思ふと、上で引傾がつて、三角形に、べたりと着いた頭らしいの、尖つた工合は、兒來也が出る蝦蟆とも見えます。で、變に其の石ながら、ふは／＼として柔らかさうで、全體があめ色に鼠色の斑のあるのが蛭が化けた様子もあつて、得體の知れないのを見ましたつけ。……何うかして居ますから、草花の色にも眩む私の目にだけ見えたのかも知れません。」

否、其は確にある礎の下の處狛犬の一つに並んで、

斜めに路を截つて、池の上へ影を投げた、老松の根に蟠つて

「ごいさいますとも、しかし其を御覽なさつて？」

「えゝ！ 此だ。此にしよう・・・彫むもの

は、澤沌として海鼠にも似た處が可い、手が着けられないで面白い。

辨財天の暗示であらうも知れないと思ひました、實際・・・思つたんだからお察しものです。

其の癖、考へるまでもない。辨天様より、第一そんなものを拵へて、其の夫人に見せられますか。

しまひには、手水鉢の處へ立つて、止めました

へ！・・・一層の事、あの、崇をするやうな木材を横倒しにして、奉納、瀬戸もの町、佐原佐助、釘店、佐原勘兵衛、と彫つて、展覽會へ投出して遣らうと・・・自棄です

其のくらゐなら石置場へ行つて、石を削つて、手前の戒名を彫附けて、玄能を返す手で、頭を割つた

方が増なんですよ。」

と氣競つて云つたが、言も終らず悄乎する。

「御堂の御本尊も端麗な女體だと存じますと、其の夫人にも面目なくつて、挿んだ頭も上らんのでした。」

然うまで夢を見ては居ないんですから、今思ふと何だか怪しいやうですけども、額堂で見ました娘も幻ではないでせうか。」

「さあ、其の事でございましたな。」

典和法師は待構へた、と云ふ體で、

「先生がお作りに成つた、六歌仙の人形を持つて居たと云ふのは、何うした譯でございます。」

「何うにも恚うにも、私は唯呆氣に取られ

て・・・・・・恚う、極り悪さうに肩を斜に、・・・  
彼處に、一體、辨財天のお姿を寫した額があり  
ます、――其を仰ぐ體で、顔を背けて居ました、  
其の娘を熟と見て居たんですがね。」

姉さん、此の人形は？

何うしたのかと未だ聞かない前に、

お一つめしませんか。

と鈴の様な聲で言ひます。

賣るのかい。

はい。

お前さんが。

御僧、當人が其處に居て、一つ買はないか、賣る、

と云ふのに、お前さんが……は變でせうが、

其は恚うです。

元來、其の夫人が月々のものを仕送つてくれます

のも、然うした小遣取りに、半端を稼がせまい爲な

んですのに、苦い酒でも打倒れるまで飲まずには、

我慢にも辛抱がして居られない處から、心の鍵を捻

切つて、苦し紛れに飲代を拵へるんです、御僧。

私の家の方を、咽喉から血を削る、ぎやつと五位

鷲の暗くやうな、切ない、苦しい、其の癖大聲で、

鋏刀、庖丁、剃刀、と喚いて来る、木乃伊に澁を刷

いたと云ふ乾干びた研屋があつて、極つて、明い眞

畫<sup>びる</sup>間<sup>ま</sup>も、  
然<sup>しか</sup>も影<sup>かげ</sup>法師<sup>ほうし</sup>のやうに通<sup>とほ</sup>る  
・  
・  
・  
・  
・  
「

「町の遠くの曲角から、ぎやつと啼いて……時々蹴躓くか、石に噛り付きさうに引掠れて、又ぎやつと啼いて来る。……如何に何だつて、其の鹽辛聲が餘り苦しさうで、玄能を掴んでのめつて胸を搔携るやうで、自分の心持に較べると、實に氣の毒らしく思つたもんですから……」

意味もなしに、唯澁茶一杯振舞はうと思つて、婆やに臺所へ呼込ませましたものです。

何程なまくらだつて、私は自分の相鑿なんか、研屋を呼んで、研がせようとは思ひません。此で居てまだ惜い、裏刃は使ひ手の生命ですもの。

庖丁か何か研がせました。

其の時が縁に成つて、七日に一度、十日に一度、月に多い時は五度、少いと三度ぐらゐづゝ、町内へ廻つて來ます毎に、ぎやつと遣るのが、家の四五軒先で、ばつたり止むと、寂寞した廂合の路地を廻つて、もつさり臺所口へ入ると、

やあ、今日は

で、えいやつと、と大な掛聲……うゝむ、  
と一つ唸りながら、千草色の半股引、乾上つて、茶  
澁の光る……寓古の瀬戸ものと云つた空脛を  
片一方、すたとんと投出して、敷居の上から板敷へ挫  
げた形で腰を掛ける。

婆さん、可え天氣だの

が、お極りで。御僧、〽尾籠ながら、股倉を引  
拵むやうに、兩堤の煙草入を抜いて、ばくり／＼と  
日南へ、ぷつきらばうな煙を吐きます。

骨と皮ですが、其が御僧、聲だけ聞いたとは大分  
違ふ元氣な爺で。

段々馴染に成ると、私が立つて出ない日は、  
旦那、御機嫌よう……今日は、うむ、

と唸つて、開戸から、のそ／＼鉢前へ入つて来て、  
蒼い面だね、一鹽さつせえ。

と言ふです……

一時串戯半分に、最初の六歌仙を一組。

お互に米が高いんだが、爺さん、軽いから荷に成



るまい、其の天秤で擔ぐ箱の中へ入れて行つて、望み手があつたらお寶にしてくれないか。いけぞんざいな不出來なものだ・・・お媒人的に頼むのは、お爺さんが相當だが、私が拵へたと云ふ事だけは極内に頼む、が、何うだい。些とばかりでも輕子賃は出さず。

で、人形を見せました。

ト兩方の掌へ、ころ／＼と据ゑた處は、平家方の落人が、阿蘇ヶ嶽の山男に掴まつたと云ふ風です。

ひやあ！ 飛ばねえぜ、匆ねねえぜ、こりや何うぢや

と小額へ皺を刻んで、げつそりした頬邊半分くひ込むほど、唇を引結んで、撓めて視ながら、

お錢があると、私が一個買ひてえくらゐだ、いくらづゝに賣んなさる。

研屋の爺がお取次にしては、些と方外な價値を云つて頼んだのです。が、別に驚きもしないで、新聞紙を引裂いて包んだのを、ト一ツ、氣の毒らしい、頂いて懷中へ入れて出ました。

五日ばかり経つと、例もより些と早めに、ぎやつと暗いて、ぴたりと止んで、臺所があたりで、  
やあ、婆さん、可い天氣だ。

すぐと開戸から、

蒼い顔だね、旦那、一鹽さつせえ。

で、懐中から新聞紙の疊んだのを出して、

あらためて、取つてくつせえ。

と云ふのを開けると、耳を揃へて……正札

通……澤山です、正札で。」

と此の時穏かな微笑が見えた。

「ふう」

と傾き、

「見事に捌いたと見えまするな。」

「私も實は案外でした……むしやくしや腹の遺瀨なさに、八つ當りと云つた工合、出鱈目に何でも試るんで、

爺に渡した六歌仙が、實際、有るものか無いものなんだか、其さへ自分で分らないくらゐだつたんですからね。

それに、したゝかな意氣込で、直ぐに又品を渡せ、追掛けて世話をして遣らうと言ふ。尤も後仕込みはして置かなかつたんですから、其の日は其なりで歸しました。

處で、賣つてくれた金子ですが、其は木の葉にはならないかはり、しびれ薬と云ふのに成つて、二三度私を轉がしたんです。

さあ、可い事に心得て、爺のやがて来る毎に、同じ六歌仙を頼んぢや、賣つて貰ふのが、御僧、此の二月から此方、引續き、既に一昨日も又一組。

其處でお話がございます。

爺は、何と云つて賺しても、宥めるやうにしても、決して禮を受取りません。自分の商賣ではないと言ひます。が、稼人が其のために時間が費える・・・・手間賃だ、と言ひました時、しやぼんをいべたりと塗廻はしたやうに頤に、がく／＼、硬さうな頤の骨を巖乘に左右に取つて、引受けて行くのは私だが、賣子は違ふ、別にある、と云ひます。

其は何となく、早くから私も心着いて居ました。破れると取替へますが、人形を渡す時、新聞に引込んで渡しますと、今度金子にして来る、其の金子を、矢張り、・・・同じ新聞に包んで超越す。・・・それが、きちんと成つて、綺麗に皺を伸して疊んであるのが、もの柔かで、優しい、床しい、可優しい手障りがするんですから。

御僧も、何となく、お聞きのうちに、然う一云ふ氣がなさりはしませんか。

「如何にも、」  
と典和法師は引入れられた顔色で、

「婦人の仕事らしく思はれますな。」

「さあ、……で、それも、少い、美しい婦人のやうに思はれて成りません。」

其の所爲と云つては、申憎い氣もします。けれども、私は頻に其の人が見たく成つた。

勿論、爺さんは何にも言はない。唯、家は深川の方、其も（方）だ、とばかり話した事があるのを便りに、此の四五日は毎日です……御僧思召しもお恥かしいが、汗を流して歩行き廻つて……何處かで、何かの便りさへありますと、恚うした風の研屋は、と尋ねますが、まるツ切知れませんか。

五位鷺が化けたんですツて？……

と、一軒ね、鳥屋の姉さんに笑はれました。

其の事です。

御僧。

ですから、賣るものをつかまへて、賣るのか、と云つて聞いたぢやありませんか。額堂で……

「で、娘は何と申しました。」

と聞くものは、じり／＼乗り出す。

「人に頼まれたと云ふんです。」  
と何故か、もの足りなさうな調子であつた。

典和も落膽したやうに胸を引いて、

「矢張り、研屋の爺さんに頼まれたでございませす

かな。」

「娘は、

否、姉さんに

姉さん、姉妹？

と又半間を喋舌る。

私の、近所の。

で、娘が申すんでは、今しがた、お湯へ行かうと

思つて、手拭と、しゃぼん箱を持つて出掛けたと云

ふ。

いづれ、此の邊の町なんでせう。……途中

で、お人形さんの此の風呂敷包みを持つた、其の姉

さんと云ふのに出逢ひました。まあ、今日も賣りに

出るよ、と思つた、と話しましたから、娘は様子を

知つてるに違ひありません。

一寸、お前さんが場へ行くのを見たら、……  
急に一風呂入りたく成った。戸は閉めて、鍵をお隣  
りへ預けて来たから、内へ取りに歸るのも億劫な、  
其をお貸し、お湯屋で借りたんぢや氣味が惡  
い。……お前さん、其の間に、いつもの辨天  
様拜んでおいでな、風呂敷づゝみを預かつて、いゝ  
お客のあるやうに、私のお参りも頼んだよ。  
と好きな事を云つて、手拭を取つて、からころ湯  
へ行く

娘はお参詣に来たんださうで。

思懸けない手柄をして、其の姉さんを驚かさう、  
とものずき半分、おつかなびつくりだけれども、結  
目を解いた、と言ひます。

私は夢を胸へ抱いて、目が覺めたやうな氣がしま  
した。

尤も、自分が其の作人なことは知らない顔。で、  
何にも云はずに、

皆買はう。

が、其の姉さんと云ふのに一寸逢ひたいと云つた  
んです。

「如何にも其の筈で、」と典和は言ふ。

「では、姉さんに然う云つて、湯から、直ぐに連れて来る。」

待つて在らつしやいまし、此處で。

と愛想よく、いそ／＼行くのを、手放しては、何だか苧環の絲が切れさうな氣がしましたけれ556ども、恚う見えて、私も臆病、眞晝間、新姐のあとへ附着いて行くとも言へませんから、池のふちを、水へちら／＼と緋鯉のやうに映つて行くのを、樹の間越に見送りました。

其が二時半。

御存じの通りです。

額に措いた、眞黒な蛇の形が、浮出して、日が暮れると、凄いやうに其の目が光つて、睨むと思ふと、御僧のお聲が掛りました。あの、蛇、あの、眞黒な……」

典和は居直つて、徐に茶を替へた。

「まづ／＼、何より、氣をお落着けなさるが可



い。

矢的は溜思して又四邊を視た。

時に、おのづから、ひとりでに音が出たやうに、

から／＼と鈴が鳴つた。

典和は薄鼠に、半ば開いた障子から明白で、半ばの障子に、矢的が其の影法師。茶盆を中に小机を控へたのが、横縁から、額堂と差向ひに黄味がゝつた燈の明で、緑の中に、薄り浮く。

ト頸の雪のやうなのが、鳥羽玉の髪かみの艶つや、撫肩なでがたのあたりが、低くさした枝はづれに、樹の下闇したやみの石段いしだんを、すツと雲を踏むか、と音もなく下りるが見える。恚いかうした光景やうす、恚いかうした事は、御堂みだうに時々あるらしい。

【完】